

SHOW-ME 映画ジネマーム

フェアウェル さらば、哀しみのスパイ

2009年・フランス映画

配給/ロングライド

113分

2010(平成22)年9月19日鑑賞

テアトル梅田



Data

監督・脚本: クリストチャン・カリオ

ン

原作: セルゲイ・コスティン『ボン
ジュール・フェアウェル』

出演: エミール・クストリツツア/

ギヨーム・カネ/ウィレム・

デフォー/アレクサンド

ラ・マリア・ララ/イングボ

ルガ・ダブコウナイト/エフ

ゲニー・カルラノフ

み ど こ ろ

ソ連邦崩壊の原因はいろいろあるが、それを誘発した「フェアウェル事件」とは? ゴルバチョフが果たした役割もすごいが、一介の情報部員がやったこともすごい。ハリウッド型のスパイ活劇とは全く異質の重厚な人間ドラマに注目!

彼はなぜ命懸けで、重大な国家機密情報の流出を? 日本国が中華人民共和国の日本自治州になろうかという危機に陥っている今、彼ほどの真剣さでこの国の行方を考えてみる必要があるのでは?

まさに、事実は小説よりも奇なり!

映画は勉強。それを強く実感させられるのが本作。原題の『フェアウェル』だけでは一見恋愛映画と勘違いしてしまいそうだが、邦題には『さらば、哀しみのスパイ』というサブタイトルがついているから、スパイ映画だということがわかる。「フェアウェル」というコードネームを持つソ連KGB(国家保安委員会)幹部・グリゴリエフ大佐(エミール・クストリツツア)が起こした情報流出事件が「フェアウェル事件」。1980年代初頭ブレジネフ政権時代のソ連の国家機密を根こそぎ西側へ流したという大事件だ。

ブレジネフからアンドロポフ、 Chernyenko を経て 1985 年に共産党書記長に就いたゴルバチョフが提起した「ペレストロイカ(改革)」によってソ連の雪解け = 民主化が始まり、1989年のベルリンの壁崩壊を経て、1991年のソ連解体に至ったわけだが、「フェアウェル事件」はその大きな引き金となつたらしい。『007』シリーズをはじめスパイ映画は多いが、そのほとんどはスパイ活劇。また、シリアスなスパイ映画でもその中で描

かかるストーリーはつくりものがほとんどだが、本作は違う。もちろんドキュメンタリーではないから、スパイ映画特有のハラハラドキドキのスリルがスピード感よく描かれる。映画を觀ていると、グリゴリエフが流したフェアウェル文書の価値のすごさがよくわかる。グリゴリエフの最後の大仕事は「X文書」の情報流し。この成功によって、西側で活躍していたトップクラスの諜報員たちが次々と逮捕されていくことになるのだが、いくら何でもここまではっきり形に表れてくると、西側に情報を流した奴がいるのでは？となるのは当然。グリゴリエフはそれを最後の仕事と位置づけていたが、果たしてコトは彼の思う通りに進むのだろうか？

まさに「事実は小説よりも奇なり」それを地でいくような、本作のスリルに興奮！

スパイも人間。人間には心が、そして家族が・・・

グリゴリエフが貴重な情報を流す相手方として指定したのが、フランス家電メーカーの技師のピエール（ギヨーム・カネ）。本作はフランス発のスパイ映画らしく、このグリゴリエフとピエールとの濃厚な人間関係が興味深い。他方、男たちは「国家のため！任務のため！」と理想を掲げて働くが、その妻たちは？自分の夫が「とんでもないことをしているのでは？」と疑うのは、まずグリゴリエフの妻のナターシャ（イングボルガ・ダブコウナイテ）と一人息子のイゴール（エフグニー・カルラノフ）。そして、民間の家電メーカーの技師にすぎない夫がなぜ家族の命を危険に巻き込むような恐ろしいスパイの仕事をしているのか理解できず、子供を守るため半狂乱のようになるのが、ピエールの妻・ジェシカ（アレクサン德拉・マリア・ララ）だ。

「フェアウェル事件」と名づけられたのは何年も後のことだから、活動しているグリゴリエフとピエールは自分のやっていることが後世でどのように評価され、現実の世界を動かす力になるのかはもちろんわからない。しかし、当の本人たちはそれぞれ「確信犯」だから、結果がどう出ようが仕方がない。ところが、夫から何も知らされず、ただ一方的にその影響を受けるだけの家族はたまたまではない。ピエールは何とか脱出することができたから結果オーライだったが、ピエールもその家族も大きな心の傷を負ったことは本作を見れば明らかだ。そして1番かわいそうなのは、グリゴリエフの妻とその息子。グリゴリエフは処刑され結果的に「フェアウェル」として名前が後世に残ったわけだが、妻と子供の痛手はいかばかりだっただろうか？しかし、グリゴリエフの息子・イゴールは、今どこで何を？

グリゴリエフの確信はなぜ？それがイマイチ？

戦後65年を経た現在のニッポン国はもはや死に体？これでは「失われた20年」の克服は無理なばかりか、近い将来中華人民共和国の日本自治州になる日も近い？私はそんな危機感を持っているが、そうかといってグリゴリエフのようにこの国の情報を敵側に流し

この国を崩壊させようとはゆめゆめ思わない。グリゴリエフは一体なぜ、どんな気持で情報流しという国家を裏切る行動を？

金のためという堕落した理由で敵側に寝返るスパイが存在するのは当然だが、グリゴリエフがそうでないことは明らか。グリゴリエフの清廉潔白さはピエールも驚くほどだ。グリゴリエフが自分の祖国を愛していることはたしかだが、情報機関の中枢部で働いているからこそわかる「この国の行方」もあるらしい。しかし、グリゴリエフは「もはや、この国はダメだ！」と見切りをつけたわけだが、彼流の世界の変え方は自分の祖国の崩壊を加速させること。グリゴリエフはなぜそんな確信を？そして命の危険も省みず、なぜ国家機密の情報流しというとんでもない行動を？

私はそこが「フェアウェル事件」最大のポイントだと思うのだが、その理由づけが本作でもイマイチ・・・？グリゴリエフがソ連邦の行く末つまりこの国は崩壊するという見通しに自信を持っているのは、彼の知性と経験にもとづくものらしいが、それだけでなぜここまで確信を？その点について、直接グリゴリエフとディスカッションしてみたいものだが・・・。

意外と簡単？これが腐った官僚機構の甘さ？

警察でもスパイでも1人で活動することは厳禁で、普通は2人チームで任務に当たるはず。しかし本作を見ていると、KGBではそうではないらしい。グリゴリエフがKGBのどの地位にランクされているのかはわからないが、本作を見ている限り、グリゴリエフはいつも簡単にスペースシャトルの設計図やフランスの原子力潜水艦の航路図などのコピーを持ち出し、ピエールに手渡していたから、私にはそれが意外。2人チームで活動してたら、そんな彼の単独行動はすぐにバレるはず。しかも、スパイは必ず大きな組織として動くはずだから、本作で見るように、自由に（？）外に出て、ピエールと直接密会し、直接機密資料を手渡すなどというのは本来不可能なはずだ。1980年代初頭のブレジネフ政権時代だから、またKGBというデッカイけれども半分腐った官僚組織だったから、それができたの？

本作にはグリゴリエフがKGBの女性スタッフと浮気するシーンが登場するなど、グリゴリエフの「普通の人間性」が顕著だが、KGBの中でこんな秘密の男女関係がまかり通っていること自体がヘン。本作を見ていると、機密情報の流出は意外と簡単そうだが、それは腐った官僚機構のおかげ？

『狼の死』をどう味わう？

「鉄のカーテン」が引かれた「寒い国」ソ連邦には自由はなく、そこでは共産主義的規律が何よりも大切。少なくとも1953年までのスターリン時代や、その後の東西冷戦、そして1962年のキューバ危機を処理したフルシチョフの時代と見ると私たちがそ

う理解するのは当然。「プラハの春」は1968年、ソ連のアフガニスタン侵入が1979年だから、ブレジネフ政権下で1980年代初頭グリゴリエフが活躍していた時代は、西欧文学がソ連に入ってくることもなかったはずだ。ところが、グリゴリエフが愛していた詩『狼の死』とは一体ナニ？

日本でも戦時中は隣り組制度があり、これが「アカ」摘発のための密告システムの役割を果たしていたが、盗聴や家捜しが日常茶飯事の共産主義体制下では、ヘンな本を持っていればすぐにバレるので？『狼の死』は子供狼を逃すために犠牲になる父親狼の役割と悲しさを謳った詩だが、そんな詩を心の支えとして日々の仕事をしなければならないのは、いかにも辛い。そんな辛さを心の中に秘めていたからこそ、グリゴリエフが見込んだ男がピエールだったわけだが、そんな重い2人の絆が、後半からラストにかけて一気に緊迫感を・・・。

やっぱぱり一筋縄では・・・

本作前半は、グリゴリエフとピエールの意外にスムーズな仕事運びの中でのさまざまな議論が興味深い。また、それぞれの妻や子供たちとの家族をめぐる確執についても深刻だが、まだ余裕がある。しかし、「X部隊」の書類をピエールに渡した後は、さすがにKGBもグリゴリエフが果たしていた役割に気づいたようだ。したがって、後半からはグリゴリエフはどんな資料を西側へ流出させたの？そして、それは誰を通じて、どのような方法で？それがKGBがグリゴリエフを尋問するポイントになってくる。

こんな時の口の割らし方（=拷問のやり方）のひどさは西側でも東側でも変わらないと思うが、本作を見る限りそれはかなり甘い。『龍馬伝』で観た岡田以蔵の口を割らせるための拷問の数々と比べても、その甘さは明らかだ。また、グリゴリエフの安否を心配する妻のナターシャと息子のイゴールにピエールが接触するシーンを見ていると、これもかなり甘く感じてしまう。そしてそれは、危険が自分にも迫ったことを知ったピエールの逃げ方にも・・・。

本作は史実にもとづいたものだから、ピエールが無事ソ連からフィンランドに脱出できたのは事実なのだろうが、本作を見ているとそれを実現させたKGBの腐敗ぶりや無能ぶりが浮かび上がってくる。なるほど、これならグリゴリエフの救出はできなくとも、ピエールがギリギリのところで脱出することは可能かも・・・。やっとの思いで脱出できたピエールが「政府」に頼んだのはグリゴリエフの脱出だが、そんなことが不可能なことは私の目にも明らかだ。しかし、そんなシーケンスの中で本作が見せるあっと驚く展開とは？

なるほど、スパイ合戦は一筋縄ではいかないものだ。そんな実感が最後にはズシリと・・・。

2010（平成22）年9月21日記